農研機構
NARO 国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構

農業者大学校広報誌「のうしゃだい」 第1号

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-11-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24514/00004567

農業者大学校広報誌

のうしゃだい

1

2009 / 9

特集
創刊記念インタビュー

校内トピックス
思い出を胸に多摩校舎最後の卒業生が巣立ち
我が豊饒祭は永久に不滅です！ など

在校生紹介
大沼 雄司さん（第 41 期生）
前田 法子さん（第 42 期生）

研究開発最前線
中央農業総合研究センター

卒業生紹介
坂井 涼子さん（新潟県 新潟市・同窓会会長）

農業者大学校本館 ホール・ギャラリー

創刊記念インタビュー

佐々木義之校長が語る 農者大の「現在（いま）」

農業者大学校は、永年にわたって活動の本拠としてきた東京都多摩市から、昨年、食料・農業・農村に関する試験研究機関が集中的に立地する「つくば農林研究団地（茨城県つくば市）」に移転し、新たな教育課程の下で農業者教育を開始しました。

新課程に移行後1年余り経過した本校の現在の様子について、佐々木校長に話を伺いました。

大学校の広報誌をいま創刊する理由

――まず始めに、農業者大学校広報誌『のうしゃだい』を創刊するに至った理由を聞かせて下さい。

佐々木　農業者大学校は職員数二十名足らずの小さな組織ですが、多くの皆様の力に支えられて、特色ある教育を行うことが可能になっています。例えば講義については、大学の先生や研究者、各界のトップリーダーの方などにお願いしています。また、本校の教育活動に賛同頂いた各界のオピニオンリーダーの方々には「教育応援団」になって頂いており、特別講義もお願いしています。さらに、これまでの四十年にわたる本校卒業生や、本校と連携協定を結んで頂いている日本農業法人協会の会員の皆様には、実践に基づいた講義の実施や学生の派遣実習の受け入れ、さらには、就農に当たっての支援など、幅広いご支援を頂いています。

『のうしゃだい』は、このように本校の教育を支えて頂いている皆様に、本校の動向や活動をより深く知って頂きたいと考え、創刊したものです。

新たな教育課程での農業者大学校の教育

――昨年は、新教育課程での最初の1年だったわけですが、特に留意されたのは、どのような点でしたか。

佐々木　新教育課程になって大きく変わった点として、入学してくる学生が非常に多様化したということがあります。学生の経歴を見ると、農業高校や道府県農業大学校を卒業した農業経験の豊富な学生がいるかと思えば、農学系以外の学部の大学卒業者もいます。また、学校を卒業してすぐに入学してくる学生がいる一方で、色々な分野で社会経験を積んでから来る学生もいます。年齢的にも、下は十九歳から上は三十九歳まで、実にバラエティーに富んでいます。

このように多様な経歴・年齢の学生が切磋琢磨することによる教育上の効果には計り知れないものがありますが、一方で、こうした多様性の裏返しである学生間のばらつきに、学校側がきちんと対応できるか、ここが大きなポイントになってきます。

このため、学生の経歴に応じた選択制の科目設定をしています。例えば、農業経験の少ない学生を対象とした農作業実習の実施とか、文系学部を卒

業している学生に対する化学とか生物学の講義の開講といった点です。

――新教育課程での、農業者大学校の教育の特色について聞かせて下さい。

佐々木 本校は、創設以来、自学自習を建学の精神とし、幅広い視野から農業と農村を考え、地域で行動できる農業者を育成してきましたが、この点は新教育課程においても変わりません。

まず、入学後三カ月間のオリエンテーション教育の後、全国各地で先進的経営を展開している農業者・農業法人の下に入り込んで四カ月間の先進経営体等派遣実習を行っています。その後、講義については、先端的な農業技術をはじめ、アグリビジネス、食の安全・安心、環境保全型農業・有機農業、消費者コミュニケーション、農村地域マネジメントなど、農業経営に求められる今日的課題について総合的に学べるカリキュラムになっています。

また、本校は、我が国最大の農業関係研究機関である独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構（農研機構）が運営する学校で、その多くの研究機関が近隣に立地するという条件を備えています。そこで、こうした利点を活かして、二年生では、農研機構の研究チームへの派遣実習も実施しています。こうした実習を通じて、学生は、研究機関で開発された先端的な技術や経営管理手法とその経営への活用について学び、科学的なものの見方・考え方を身につけることができます。さらに、ここで知り合った第一線の研究者とは、卒業後も気軽に相談できる間柄になれます。こうした人脈は、農業者にとって、まさに生涯の宝と言えるでしょう。

このように、本校では、講義と実習を組み合わせ、それらを演習で結びながら、卒業後の就農に向けた一貫教育を行っています。

△ 農作業実習のようす

農業者大学校の今後の展開

――最後になりますが、農業者大学校の今後の展開について、抱負を伺います。

佐々木 来年の春には、新課程最初の学生である第四十一期生が卒業していきますが、その半分以上が非農家出身です。まずは、この第四十一期生を、それぞれの希望に応じ、独立就農や農業法人への就職等の道に確実に導くべく全力を注ぎます。本校では、円滑な就農ができるよう、就農支援に関する専門の職員を置いて、全国の就農支援機関や受け入れ市町村などとの連絡調整を行い、就農先と学生とのマッチングを進めています。また、地域農業のリーダーとして全国で活躍している卒業生にアドバイザーをお願いし、学生の相談に乗って頂いています。今後は、就農後の地域への定着の支援も含め、卒業生との継続的な連携の強化も図っていきます。

また、本校では、現役の農業者を対象とするスキルアッププログラム「専修科」のコースも開講していますが、農業者の生涯教育機関としての役割をも担っていきたいと考えています。

さらに、農業者教育については、本校のみならず、道府県農業大学校等でも、それぞれ特色ある教育が行われています。若い農業の担い手の育成が重要な課題となっている中で、農業者教育に携わる学校同士の連携・交流にも、積極的に取り組んでいきます。

△ 道府県農大等との連携を促進するための会議のようす
（平成 20 年 10 月　農業者大学校にて）

農業者大学校 校長
佐々木　義之
Yoshiyuki Sasaki

1942 年 徳島県生まれ
1965 年 京都大学農学部農学科卒
1970 年 同大大学院農学研究科博士課程修了
1989 年 同大教授
2006 年 定年退職　同大名誉教授
2008 年 農業者大学校校長に就任
専攻は家畜育種学

筑波山ハイキングで気分もリフレッシュ

6月1日、農業者大学校の創立記念日に筑波山ハイキングを行いました。朝、2台のバスに分乗して農業者大学校を出発。通勤の混雑も治まった頃で特に渋滞もせず、予定どおり 10 時前に筑波山神社前の駐車場に到着しました。前日までの雨のため登山道はぬかるんでおり、滑らないように慎重に足元を確認しながら、ゆっくり2時間半ほどかけて山頂まで登りました。

下山すると今度は、下妻市にあるグリーンツーリズム施設「ビアスパークしもつま」に行き、学生は思い思いの時間を過ごしました。

毎日授業に追われる学生にとっては、またとないリフレッシュの機会となったようです。

△ 登山に汗を流す学生

決意も新たに、いざ出陣！
～ 先進経営体等派遣実習 ～

1年生は、7月から 10 月までの4カ月間、先進経営体等派遣実習に入ります。この実習は、全国各地で先進的経営を展開している農業者・農業法人の下で行うもので、農家・農村に入り込んで先進的な農業技術、農業者の経営感覚や価値観を学ぶことを目的としています。

つくばの学生の実習は今年で2回目を迎えますが、今年は、事前の決意表明に加えて、昨年実習を経験した2年生との意見交換を行い、準備万端整えてそれぞれの派遣先へ向かいました。決意表明では、各学生は約5分間の持ち時間でプレゼンテーションを行い、実習先の概要説明や実習への意気込みを発表しました。

△ 先進経営体等派遣実習に向けた決意表明のようす

我が豊饒祭は永久に不滅です！

農業者大学校では、第3期生以来 38 年間にわたり「豊饒祭」（全国の卒業生などが提供する農産物の販売等を主な内容とする学園祭）を開催してきました。

今年3月の多摩校舎廃止に伴い、豊饒祭もその歴史に幕を下ろすのではないかと、一時は心配しました。しかし、「多摩の伝統を途絶えさせてはいけない」という学生の強い熱意により、今年以降も、つくば校舎で実施することになりました。

今年は 11 月 22 日（日）に実施することが決まっており、多摩での最後の豊饒祭を経験している第 41 期生（現2年生）を中心に企画を練ることになっています。

どうか思い出に残る祭りになってくれますよう。

△ 昨年の豊饒祭のようす（多摩校舎にて）

校内トピックス

△ 卒業式で校歌を斉唱する第39期生

多摩校舎最後の卒業生が思い出を胸に巣立ち

3月4日、農業者大学校（多摩校舎）では、平成 20 年度の卒業式が挙行されました。当日は生憎の雨模様の天気で、今回が多摩校舎での最後の卒業式となることを、空も悲しんでいるかのようでした。式典には、つくば校舎から第 41 期生や職員が参加したほか、OBとしては第37期生が全国から駆けつけてくれました。式典では、多摩で長く英語の講師をお願いした黒川先生のピアノ演奏に合わせて校歌斉唱が行われ、第 39 期生（卒業生）と第 41 期生（在校生）が力強い歌声を響かせていました。

第42期生31名が希望に燃えて入学

4月8日、農業者大学校では、桜の祝福の中で入学式が執り行われ、第 42 期生 31 名が入学しました。緊張と昂揚に包まれた学生の初々しい様子を見ていると、こちらまで微笑ましい気持ちになります。第 42 期生の年齢や経歴はバラエティーに富んでいますが、農業者になりたいという思いは一つです。

式典では、農研機構の堀江武理事長が、「今はきれいに咲いている農林研究団地の桜並木も、団地ができた30数年前には貧弱な木でした。それが現在では大木となり堂々と花を咲かせています。農者大の学生も、30 年後には、堂々とした、全国に名が知れる農業者になって下さい。」と挨拶をしました。

△ 入学式で挨拶に立つ堀江理事長

職員紹介

授業から恋愛まで学生達は何でも相談

教育指導専門職（5人）

教育指導専門職は演習（ゼミ）、進路サポートを中心に学生の指導に当たっています。専門的な農業技術、経営方法などの授業は外部から一流の講師陣を招いており、講師のコーディネートや学生との橋渡しも役割です。

調査・見学からレクリエーションまで、学生達と一緒に何かをする機会が多く、日常的にも授業についての相談をはじめ、将来の就農計画から恋愛まで幅広く相談を受けるなど、学生達とはとても濃い関係にあります。

今後の我が国農業のリーダーとなる担い手を育てるという重要な役割を果たすため、時には厳しく突き放し、ときには懇切丁寧に、その人に合わせた最も適切と考えられるアドバイスを行うため、教育指導専門職が相互に連携をしっかりとりながら関係機関等の協力を得て指導を行っています。

△ 左から、上野、伊藤、福岡、原田、末永の各教育指導専門職

在校生紹介

農者大で学んだのは「仲間の大切さ」

大沼 雄司 さん（第41期生）

私の周りには明日の農業を考え、熱い志を共に分かち合う仲間がいます。仲間がいることの喜び、大切さを、農業者大学校での生活を通じて改めて実感しました。

農業をする上で大事なものとして、**「人とのつながり」**に勝るものはありません。仲間を信頼し、自分を信じ、そこに強い「絆」が生まれ、協力、刺激し合い、共に切磋琢磨し、互いに認め合うことで更なる高みを目指せるのではないでしょうか。私は人のつながりを最も重要視しています。そこには、信頼、友情、希望、**「愛」**があります。**「人とのつながり」**は何物にも代えがたい財産です。仲間を愛し、自然、生命を愛し、そして自身を愛する。

私は仲間と共に、信念を持ち、熱き思いを胸に、太陽の下で生命を育み、安全で確かな、生命あふれる農産物を提供していきたいと思います。

在校生紹介

全国レベルの情報に触れて刺激的な毎日

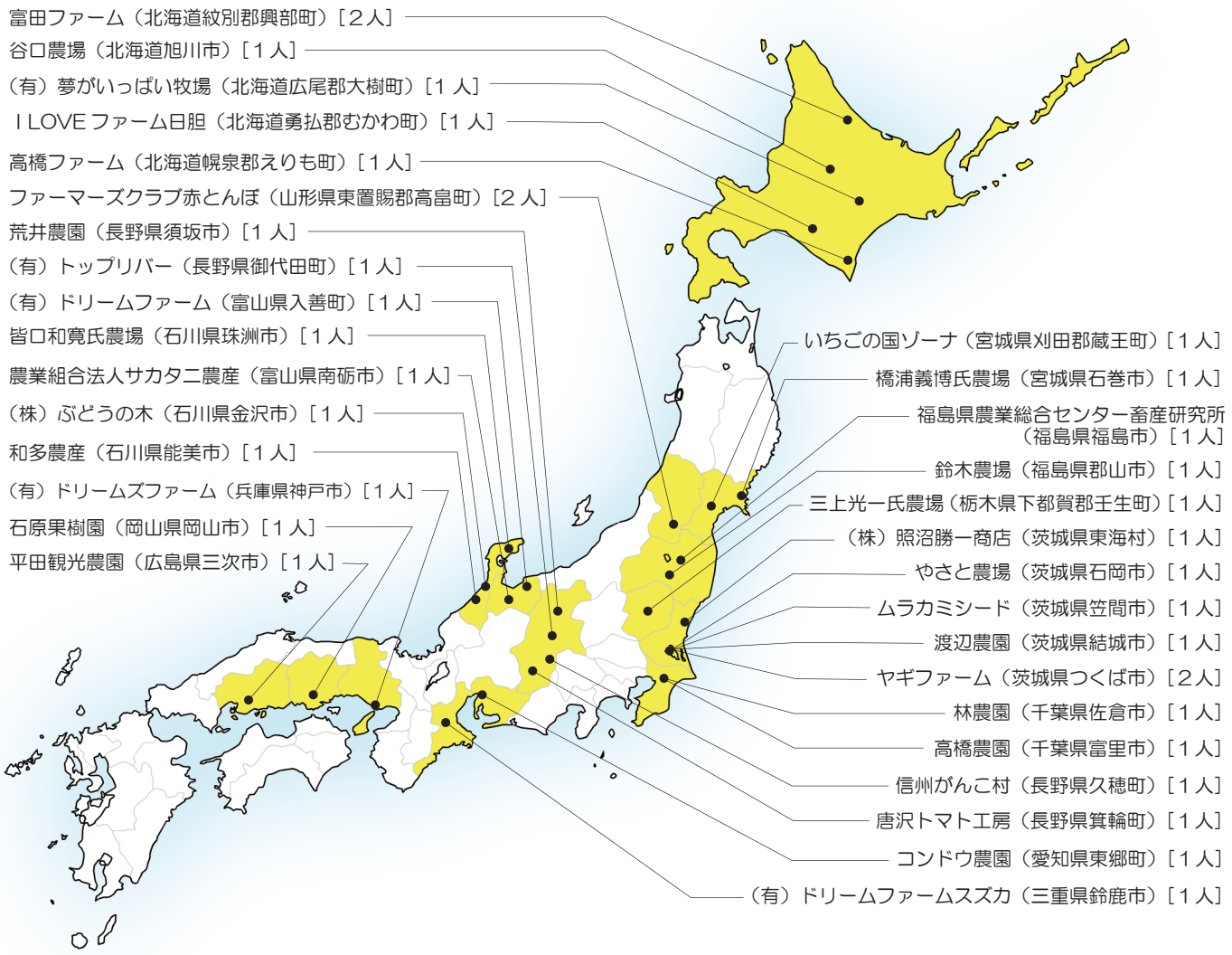
前田 法子 さん（第42期生）

私は道府県農大の出身ですが、農者大が道府県農大と違うのは、設備や授業のレベルはもちろんですが、やはり、全国レベルでネットワークを作れるという点が一番大きいと思います。

これから農業を始めようとするなら、地域での農業の現状や、技術や経営に関する最新の情報は、きっと役に立つはずです。例えば、農者大の卒業生には、最先端の農業経営を実践されている方も多いですが、講義では、そんな農業者の方の話も聞くことができます。

また、農者大には、年齢も経歴も様々な学生が全国から集まってきています。こうしたバックボーンの違う仲間と、一緒に食事をしたり、時にはお酒を飲みながら、情報交換をしたり、将来の夢を語るのは、新たに気づかされることも多く、とても刺激的です。

第 42 期生 先進経営体等派遣実習 派遣先一覧



研究開発最前線

農研機構の新技術を分かりやすく紹介

「うね内部分施用技術」

中央農業総合研究センター
高度作業システム研究チーム 上席研究員　屋代　幹雄

農研機構（東北農研、中央農研）では、キャベツ・ハクサイ栽培前のうね立て作業時に苗を移植する位置付近の土壌に肥料や農薬を攪拌しながら帯状に施用する「うね内部分施用技術」を開発しました。この技術の導入により、施肥及び農薬の効果を保ちつつ、肥料を慣行の７０～５０％に、根こぶ病防除用の農薬を約３分の１に大幅に削減できることを明らかにしてきました。

また、農業機械メーカーと共同で「うね内部分施用機」の開発を行い、全国各地で現地実証試験を進めてきており、既に、市販もされています。

本技術は、生産資材の価格高騰が大きな問題となる中で、コスト低減を図るとともに、これらの資材による環境負荷を低減する技術として注目されており、今後、他の野菜への応用などを通じて、普及を進めて行きたいと考えています。

卒業生紹介

農業3年生、ドタバタ奮闘中！

新潟県 新潟市
坂井 涼子 さん（同窓会会長）

新潟で一年中、小松菜栽培をしている37期生の坂井涼子です。

これでもかというくらい有機質肥料たっぷりのフカフカの土で小松菜栽培をしている父の背中を見ながら日々奮闘しています。「働き、疲れ、腹が減り、眠る。四季を間近に感じながら、冬は太り夏は痩せる。」そんな人間的機能をフルに使う農業はやはり素晴らしいなと日々感じています。小松菜ハウスの横には直売所を設け、新潟の新鮮な地元農産物を元気に通年販売しています。最近楽しいと思うことは、私が以前芸能界にいた繋がりから、野菜ソムリエのタレントや、かっこいい農業の服を作りたいというデザイナー、野菜スイーツを作るパティシエ、ブロックイーンのフードスタイリスト…野菜をキーワードに「みんなの力を集結すると何か…できそうだよね！」という期待に胸ふくらんだ若い女子を集めた「野菜女子の会」を結成し、活動内容を話し合っている時が今、一番楽しい時間です。Goo ブログ「農業3年生」でも奮闘中！

インフォメーション

新・農業人フェアへのブース出展

◆福岡 ▽日時＝平成二十一年九月十二日（土）一〇時三〇分～一六時 ▽場所＝福岡ファッションビル ◆池袋 ▽日時＝平成二十一年九月二十六日（土）一〇時三〇分～一六時 ▽場所＝池袋サンシャイン・ワールドインポートマート4F ◆大阪 ▽日時＝平成二十一年十月三十一日（土）一〇時三〇分～一六時 ▽場所＝梅田スカイビル・タワーウエスト10F ◆札幌 ▽日時＝平成二十一年十二月十二日（土）一〇時三〇～一七時 ▽場所＝札幌コンベンションセンター

農林漁業ことはじめ2009への出展

◆名古屋 ▽日時＝平成二十一年九月十九日（土）▽場所＝名古屋中小企業福祉会館 6Fホール ◆仙台 ▽日時＝平成二十一年十月三十一日（土）▽場所＝せんだいメディアテーク・オープンスクエア ◆東京 ▽日時＝平成二十一年十一月三日（祝）▽場所＝中央区立産業会館・2F展示室 ◆東京（フェスタ） ▽日時＝平成二十一年十二月六日（日）▽場所＝池袋サンシャインシティ・噴水広場

農業者大学校が贈るサイエンス・カフェ

◆大阪 ▽日時＝平成二十一年八月一日（土）一三時三〇分～ ▽場所＝エルおおさか七〇九号会議室 ◆名城大学 ▽日時＝平成二十一年十月三日（土）一三時三〇分～ ▽場所＝名城大学 ◆明治大学 ▽日時＝平成二十一年十月二十四日（土）一三時三〇分～ ▽場所＝明治大学

農業を語る若者の集い

平成二十一年十一月及び十二月に、東北地域及び中国四国地域で開催します。詳細は農業者大学校ホームページでお知らせします。

道府県農業大学校との連携を深める取組

◆農業者大学校サマーセミナー ▽対象者＝道府県農業大学校の学生等 ▽日時＝平成二十一年八月五日（水）一四時～七日（金）一二時 ▽場所＝農業者大学校等 ◆教育を考える農業大学校等担当者会議 ▽対象者＝道府県農業大学校の指導職員等 ▽日時＝平成二十一年十月二十七日（火）一四時～二十八日（水）一二時 ▽場所＝農業者大学校等

農業者大学校学園祭「豊饒祭」

▽日時＝平成二十一年十一月二十二日（日）▽場所＝農業者大学校

農業者大学校オープンキャンパス

▽日時＝随時（詳しくは農業者大学校ホームページをご覧下さい）▽場所＝農業者大学校等

農業者大学校広報誌
のうしゃだい 第1号
＜発行日＞
平成21年9月1日
＜編集発行＞
独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構
農業者大学校 企画管理室 企画チーム
〒305-8523
茨城県つくば市観音台 2-1-12
TEL 029-838-1025
http://farmers-ac.naro.affrc.go.jp/
農研機構 農業者大学校